

物性研を卒業（中退）して

家 泰弘

昨年 9 月末日をもって物性研を「中退」しました。8 月初めのことでしたが、日本学術振興会から理事就任の要請があり、迷った末お受けすることにしました。かつて文部省の学術調査官や学術振興会の学術参与を務め、その後も文部科学省の学術分科会で科研費の制度改善に関わってかかわってきたこともありますので、「まあ、やるしかないか」と腹を括りました。独立行政法人の役員人事は閣議承認事項なのだそうです。折からの安保国会の影響もあって閣議決定がなかなか下りず、正式決定／公表解禁が 9 月 25 日で 10 月 1 日着任という慌ただしいことになってしまいました。ファンディング機関である学振の役員とファンディングを受ける側である大学のポストとは利益相反の観点から両立しないということで、定年まで 1 年半を残して東大を退職することとなりました。私自身にとっても思いがけない急な話でしたが、そういう事情で、周りの多くの方々には「寝耳に水」の異動となってたいへんご迷惑をおかけしました。

物性研の所員として、1985 年以来 30 年在籍しましたが、そのうち前半 15 年が六本木、後半 15 年が柏でした。今や物性研も六本木時代を知らない世代が大半となりましたので、柏移転にまつわる思い出の一端を書いておくことも若干の意味があるかと思えます。柏の葉地区は今でこそ近未来都市風になっていますが、1994 年頃に移転先候補地として初めて視察に来た時には一面の野原に十余二小学校の建物があるだけという風景で、視察団一同かなり意気消沈したことを覚えています。六本木の地からの移転には当然ながら反対の意見も少なからずありましたが、20 年経ってみるとあの時点で移転を決断したことは本当に良かったと思っています。

物性研の建物の設計に関しては、足繁く本部に行って施設部と随分やり合いました。門型の建物という研究棟の基本設計は既に決定されていて我々の力では如何ともしがたいものでしたが、安岡所長直々の交渉によって、各階に(最初の設計には無かった)渡り廊下が付くことになりました。部屋の配置や実験室の仕様については我々の言い分をかなり聴いてもらえましたが、それでも設計に関して心残りに思っていることが幾つかあります。その一つは、階段とエレベーターが四隅に分散しているために、日常的に自然に顔を合わせる場所というものが無いことです。せめて 2 階のラウンジはメールボックスに近接して配置すればよかったと後悔しています。高層棟の高さは 32m と決まっており、1 階のピロティの高さを抑えてでも 6 階大講義室の天井高を確保したかったのですが、設計者の同意が得られず実現しませんでした。本館北側の各階廊下の端に観音開きの搬入扉を付けることも叶いませんでした。そのため上層階への大型装置搬入はエレベーターの容量で制約されています。一方、部屋の仕様でこだわったのは、各部屋のドアの一部をガラス窓にして廊下から見えるようにしたこと、実験機器や寒剤容器の出し入れを容易にするためにドアの敷居の段差を無くしたこと、などです。南側窓のブラインドにタテ型を選んだのは正解だったと思います。

建物は使い始めるといろいろと不具合が見えてくるものですが、当時の本部施設部は先陣を切って柏キャンパスへの移転を決めた物性研に対してたいへん好意的で、こちらの要望によく耳を傾けてくれました。中央渡り廊下や中央階段に側板を付けたり、南側両側の階段に手すりを付けたり、といった手直しはその例です。一足先に使用開始した低層実験棟では強磁場のコンデンサーバンクやレーザーの電源を設置した地下ピットに梅雨時に水が出るという深刻なトラブルが発生しましたが、交渉の結果、実験棟周囲に深い排水溝を掘るといった大工事を実施して解決してくれました。また、夜間照明設備付きのテニスコートも実現しました。これらに要した費用がどのくらいで、どうやって捻出したのかは敢えて訊かないことにしました。参考までに、柏移転[1] および物性研創立 50 周年[2] の際に書いた文章を挙げておきます。

2008 年度から 5 年間所長を務めました。共同利用・共同研究拠点という新制度が始まることになり、根岸事務長はじめ事務の方々のご協力によって拠点申請を行い、2010 年度から共共拠点として再出発することができました。前任の上田所長時代の国立大学法人化の時点から始まった運営費交付金および教職員ポストの削減はその後「着実に」続けました。そこに追い打ちをかけたのが東日本大震災／福島原発事故に続く電気料金の高騰です。固定的な支出の割合が年々多くなって所長裁量に回せる分が減りました。瀧川所長はもっと苦労されていることと思います。

さて、学術振興会に移って何をやっているかを少し書いておきましょう。ご承知のように、学振は文科省の独立行政法人として、研究助成(科研費制度)、人材育成(特別研究員制度など)、国際交流などの事業を実施しています。実に多種多様な事業を実施していることを学振に来て初めて知りました。理事長のほか理事が2名で、もう一人の理事(事務官系)が総務および財務の担当、研究者系の理事である私の担当は上記の事業全部ということになっています。世界に10か所ある学振海外センター等への出張も多くなりそうです。まだ柏に住んでいますので、10数年ぶりに通勤定期を持って四谷の職場に通う生活パターンになっています。所掌事項について学習の日々ですが、それと同時に、いろいろな分野の耳学問を楽しんでいます。

思えば1979年に田沼研究室の助手として採用していただいて以来、アメリカでの3年間以外はずっと物性研で過ごしました。通算して三分の一世紀も長居してしまったことは決して褒められた話ではありませんが、物性研はそれだけ居心地の良いところでしたし、家・勝本研究室のスタッフや学生の皆さんと楽しく研究ができて幸せでした。また研究以外でも、物性研の教員・技術職員・事務職員・秘書・学生の皆さんとスポーツなどいろいろな活動で遊んでいただいたことを懐かしく思います。お世話になった御礼とともに、今後の物性研の益々の発展を願って退職のご挨拶といたします。

[1]『柏キャンパスの物性研究所』固体物理 vol.35 (2000) no.8, p.569.

[2]『物性研究所の歩みと展望』日本物理学会誌「小特集：物性研究所とその全国共同利用の50年の歩み」vol.63 (2008) no.12, p.919.

